

増田渉直筆注釈本による『呐喊』『彷徨』の新研究 ——魯迅の短篇小説「孤独者」「傷逝」および翻訳 『労働者シェヴィリョフ』を中心に——

林 敏潔

はじめに

周知の通り、魯迅（1881～1936）は1902年から1909年まで日本に留学した。1920年代から30年代にかけて夏目漱石、芥川龍之介、厨川白村など多くの作家・文芸批評家の小説・エッセーおよび文学論を翻訳し、さらに自作の小説『兎と猫』を日本語に訳してもいる。そのほか『改造』『朝日新聞』など当時の著名なメディアに、自ら日本語で書き下ろした小品を発表してもいる。

1931年、魯迅は、向学心が大変強い日本の青年学徒であった増田渉¹（1903-1977）に対して、上海の自宅で個人レッスンを約一年間に渡って行い、『呐喊』および『彷徨』の二つの小説集を講読解説した。日本語に精通し日文中訳に関して豊富な経験を持つ魯迅が、当時中国文学を学んでいた増田渉の為に直接教授した際に、小説集単行本に書き留められた注釈メモは、魯迅小説の細部を解説する際の重要な資料と考えられよう。

増田は1931年に魯迅の友人であった佐藤春夫（1892-1964）の紹介状を持って上海に渡り、一年近く魯迅宅に頻繁に通いながら、魯迅から彼の作品に関する一对一の個人指導を受けた。後年、増田はその間の状況を次のように回想している。

¹ 増田渉は、1929年に東京大学文学部中文科を卒業し、旧制松江高等学校（現・島根大学）、大阪市立大学、関西大学教授を歴任、中国古典文学および魯迅研究、魯迅文学翻訳において活躍した。

私はとにかく、彼について勉強しようという気持ちから、最初は毎日内山書店へ、彼があらわれる時間を見はからって出かけて行った。〔中略〕その次に『中国小説史略』についての質問をはじめた。それは最初から翻訳するつもりであったし（内山完造氏がそれをすすめた）、ほとんど逐字的に講解してもらった。そのころは内山書店の店頭ではなく、魯迅の宅に直接出かけるようになっていた。内山での「漫談」（当時そうっていた）をすますと、彼とともに彼の寓居へ行き（内山からその寓居までは二分か三分の距離）、それから彼のテーブルに二人並んで腰かけ、私が小説史の原文を逐字的に日本語にして読む、読みにくいところは教えてもらう、そして字句なり内容なりについて不審のところは徹底的に質問する。その答えが、字句の解釈なら簡単であるが、内容となるといろいろの説明があるので相当時間がかかる。たいてい午後の二時あるいは三時ごろからはじめて夕方の五時から六時ごろまでつづけた。……それから『呐喊』と『彷徨』との二小説集の講解も終わったのがその年の暮れであった。私はだからその一年、春夏秋冬、毎日彼の書斎に通ったわけである。そして一日、三時間くらい彼の個人教授をうけたことになる。……いま当時の講解については、若干の書き入れのメモがのこっている……²

その際に用いた『呐喊』『彷徨』二冊の本には、師弟二人が日本語で対話した際に書き込まれたメモが残されており、作品読解の上で大変貴重なものであると言えよう。これらの貴重な注釈メモは、魯迅と増田渉との師弟愛を明示するだけでなく、魯迅小説の“空白”の背後に隠された意味を推定し、魯迅小説の幾つかの謎を解明するのに有用である。

本稿³では、まず、直筆版『呐喊』『彷徨』の調査状況と研究意義を述

² 増田渉『魯迅の印象』角川選書、1970年、16～18頁。

³ 本稿は『中国現代文学研究叢刊』2013年第11期に発表した拙稿「増田渉注釈本『呐喊』『彷徨』研究新路径－兼論『傷逝』与『孤独者』的關係」を、さらに分析を深め、新たに展開させたものである。引用した魯迅作品の日本語訳の内、『孤独者』など特に

べ、主に増田渉注釈本『彷徨』における「lover」という魯迅自身による解説メモを参照しながら、「孤独者」の主人公である魏連受が「私に幾日かでも生きることを願った人」とは誰を指すのか、という学界で久しく議論されてきた謎を解明したい。そしてさらに「傷逝」と「孤独者」という小説二篇の相互的関連・補完関係および「孤独者」と「傷逝」の創作テーマ、そして魯迅訳アルツィバーシェフ原作の長篇小説『労働者シェヴィリヨフ』との影響関係について考察して行きたい。

(一) 増田渉直筆注釈メモの調査

増田渉の没後、「御遺族の深いご理解のもとに、その蔵書の全部が一切をあげて関西大学に委譲され」、関西大学図書館は、増田旧蔵書約 15,000 冊を「増田渉文庫」として「特別に保管」し公開している⁴。

増田渉メモの記録がある増田旧蔵『呐喊』『彷徨』も、増田渉文庫の一部である。両書には毎頁にぎっしりと書き込みがあり、それは鉛筆によるものと推定される、主に日本語による注釈メモが書き込まれている。魯迅による「一対一」の親身の指導を受けて形成された増田渉直筆注釈は、両書収録の短篇小説群を解読するための大変貴重な資料と考えられよう。

この魯迅と増田渉との直筆注釈に関しては、筆者の恩師である丸尾常喜元東京大学教授（1937-2008）が晩年の研究課題とされていた。丸尾教授は退官後も、大東文化大学中文科主任教授、日本中国学会理事長などを歴任されたが、急逝により、その志を果たせなかった。

藤井省三・東京大学教授は、『呐喊』『朝花夕拾』および『彷徨』『故事新編』に基づく短篇選集『故郷／阿 Q 正伝』『酒楼にて／非攻』を日本語訳するに際し⁵、2010 年 1 月に関西大学増田渉文庫で二日間の調査を行い、

注記されていないものは拙訳である。本稿執筆に際して懇切にご教示くださりネイティブチェックの労を執って下さった藤井省三・東京大学文学部教授に感謝申し上げます。また、関西大学図書館の資料掲載の許可に対して厚くお礼を申し上げます。

⁴ 肥田皓三 関西大学文学部教授、2008-12-25http://www.kansai-u.ac.jp/library/library/collection/masuda_int.html

増田涉旧蔵の『呐喊』（上海北新書局刊一四版、烏合叢書、1930年7月刊）、『彷徨』（上海北新書局刊八版、烏合叢書1930年1月刊）および『中国小説史略』（上海北新書局刊1931年7月初版）における魯迅著書の書き込み状況を調査した。また同月、関西大学図書館長宛に同館規定の「特別複写許可願」を提出し、デジタル版による資料保存を希望したが、最終的に、関西大学側はマイクロフィルム作成を許可した。ただこのマイクロフィルムからの紙焼き版では、筆跡が不鮮明で、点が消え、横画が見えない書き込みも多い。

メモは、草書体の漢字ひらがなで記されており、非常に難読であるため、藤井省三氏は書道専攻卒業の和泉日実子氏⁶に、『彷徨』の書き込み解説を依頼した。和泉氏は業余の熱心な解説作業で、書き込みの約60パーセントを解説した。

和泉氏は注釈本『呐喊』『彷徨』の中の筆跡に関して鑑定を行い、2010年と2013年との二度にわたり見解を披瀝し、まず2010年には以下のように推定している。

筆跡から魯迅は左側に座り、増田は右側に座っていたことだろう。筆跡は三種類あると思われる。

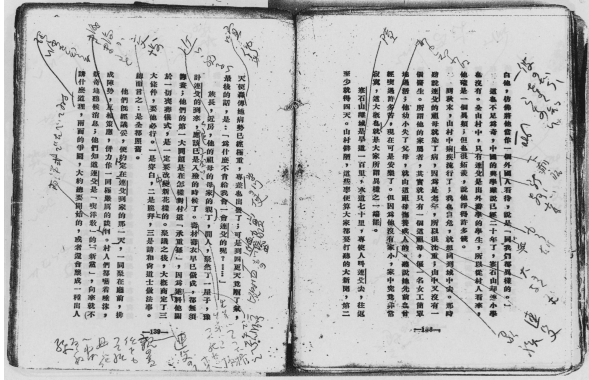
1. 字数が最も多い字体（増田自身の手によるものであろう）。
2. 漢字の崩しが達筆で、始めから最後まで、線がつながっているもの。
3. 横書きのもので、文字の最後が流れているもの（止まっていないで流れている）で、右起こしで漢字平仮名混じりで横書きされている第三の字体。これは無理な姿勢で書いたためか、字体が右に傾いており、魯迅の筆跡か増田の筆跡か、あるいは第三者の筆跡かを判読することは難しい。

本論文では1、2、3それぞれの例として、138-139頁を図版Ⅰ、165頁を図版Ⅱ、194頁を図版Ⅲ、それ以外に筆者は難読文字の例を163頁を図版Ⅳとして引用する。

⁵ 光文社古典新訳文庫、各2009年4月および2010年10月刊行。

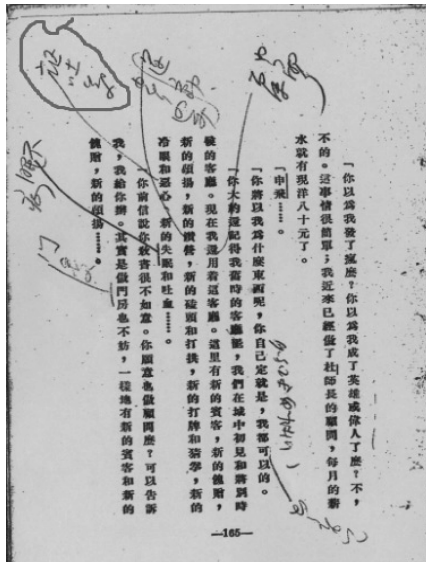
⁶ 和泉日実子（いずみ・ひみこ）は筑波大学大学院書道専攻卒業、元NHK出版『ラジオ中国語』編集者、元『人民中国』日本語専門家。

以下の図版は、関西大学図書館「増田渉文庫」収蔵の『彷徨』（上海北新書局刊八版、烏合叢書 1930 年一月刊）の内の一部である。



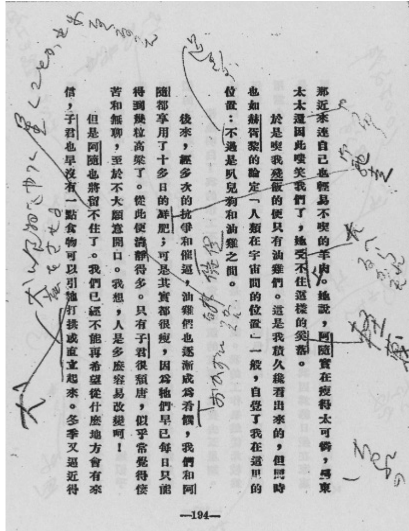
図版 I P138-P139

最も多い字体は増田渉直筆の書き込みと推測される。



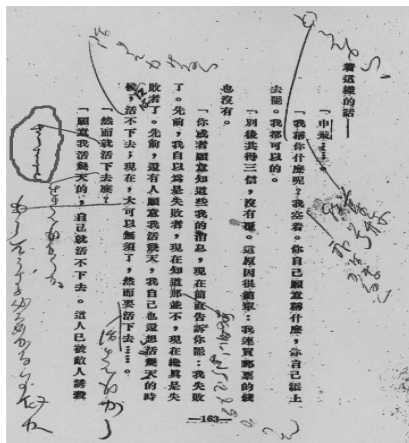
図版 II P165

漢字の崩しが達筆で、下線がついているのは魯迅の筆跡と推測される。



図版Ⅲ P194

横書きで、文字の最後が流れている（止まっていないで流れている）書き込みは、縦書きの行間などに右起こして漢字平仮名混じりで横書きされており、無理な姿勢で書いたためか、字体が右に傾いており、魯迅の筆跡か増田の筆跡か、あるいは第三者の筆跡かを判読することは難しい。



図版Ⅳ P163

難読文字：さうすると〔そうすると〕

その後、藤井省三氏は公務多忙のため、魯迅直筆注釈と増田渉との関係に関する調査研究を一時停止したが、2013年3月に至ると、和泉氏は筆跡は異なるものの、二人の筆跡、あるいは同一人物の異なる年代による可能性も有り得る、という新見解を表明している。このことから、筆跡鑑定作業の困難さが理解できよう。

2012年1月より筆者は、藤井省三氏と魯迅・増田渉直筆注釈本『呐喊』『彷徨』の共同解読作業を開始し、先ず主に『魯迅・増田渉師弟答問集』（1986年刊行）を参考にしつつ、『彷徨』直筆注釈の解読をほぼ完成させた。

日本の学者の伊藤漱平、中島利郎による編著『魯迅・増田渉師弟答問集』の「例言」は、同書刊行について次のように述べている。

本書は、増田渉がサイレン社版『支那小説史』および改造社版『世界ユーモア全集』第十二巻支那篇等を日本語訳するに当たり、昭和七年（1932年）から同十年にかけての数年間に、師と仰ぐ魯迅との間に取り交わした質疑応答書の現存するもの約80点を影印し、これに釈文を附したものである。⁷

『魯迅・増田渉師弟答問集』では、増田は漢字平仮名混じりの日本語と漢字片仮名混じりの日本語とを併用している。これに対し魯迅が漢字片仮名混じりの日本語のみを用いている点に鑑みるに、私たちは和泉氏が分類した「3. 横書きのもの」は増田渉の筆跡である可能性が高いと判断している。

筆者はこれまで北京・上海などの専門家に個別に鑑定を依頼したが、両書のノート字体は崩し字が多く、確定が困難であるため、現在に至るまで結論には至っていない。このように、この解読作業は任重くして道遠し、故に、ぜひとも専門家たちのご協力が必要なのである。

⁷ 『魯迅・増田渉師弟答問集』、汲古書院1986、11頁。杨国华译『魯迅増田渉師弟答問集』华东师范大学出版社、《凡例》1頁。

(二) 増田注釈メモの拓く新しい地平

増田渉注釈メモの『呐喊』および『彷徨』に関する研究には、以下のような意義がある。

第一に、魯迅は、増田渉と「国を異にする」ものの、随所で師の学生に対する大いなる愛情を示している。国境を超えたこのような学問的、人間的交流の広がりや深さを明らかにすることにより、魯迅文学の意義への理解を増すことができるであろう。

東大中文で増田渉の一年後輩の学生であった松枝茂夫（1905～1995）は、増田と同様に古典中国文学から魯迅・沈從文までの研究・翻訳で広く知られている。彼は『魯迅・増田渉師弟答問集』の「序」で次のように述べた。

この本を読んで何よりも私達を感動させるのは、国を異にするこの師弟の間の絶対的信頼関係である。増田さんはまるで母親の懷ろに飛びこんで甘えている子供のように。それを暖かく迎えて抱きしめてくれる魯迅先生。どんな幼稚なつまらぬ質問にも決してよい加減にあしらず、懇切丁寧、噛んで含めるように答えてくれる魯迅先生の態度には本当に頭がさがる。当時の魯迅先生は一国を敵にまわして夜を日に継ぐ文筆活動のただなかに在ったはずである。そうした百忙の中で心から嬉しそうに、時に冗談をまじえながら答えを書いている魯迅先生の笑顔が眼に見えるようだ。

これは私達にあの有名な故事を思い起こさせる。藤野先生が仙台の医学校で魯迅に対して行ったあの無償の行為を。魯迅先生はひよっとしたらそのお返しを増田さんに向かってしているのではあるまいか、とそんな気さえる。

その意味でこの本は一種の愛情の書といってもよいのではあるまいか。この中にはほかの書物などからは決して得られぬ何ものかがあ。それは学問知識などをはるかに超えた、もっと生々しい、もっと美しい、もっと尊いものである。⁸

増田渉直筆注釈メモの研究を進めることの第二の意義は、魯迅文学の日本語訳の改善および日本における更なる普及である。魯迅作品は短篇小説「故郷」が日本で五種類刊行されている中学国語教科書すべてに収録されているほか、前述の光文社古典新訳文庫（藤井省三訳、計2点）⁹のほか、現在も刊行中の文庫本として岩波文庫（竹内好訳、計4点）、ちくま文庫（竹内好訳『魯迅文集』全6巻）、角川文庫（増田渉訳）、講談社芸文庫（駒田信二訳）、偕成社文庫（小田嶽夫訳）など各種文庫の短編集等々がある。日本の文庫本とはポケットサイズの400円から1000円ほど（人民元で約30～80元）の廉価普及版で、初版は一万部ほどから数万部、一刷りは2000～3000部ほどで、各文庫とも毎年或いは数年に一度は増刷されており、魯迅作品文庫本の毎年の出版総部数は数万部に達することであろう。

このように日本において魯迅作品文庫本は大きな影響力を持っている。しかし、誤訳・主観的意識も全くないと言うわけではない。一例を挙げれば、前掲図版の増田渉日蔵『彷徨』（上海北新書局刊八版1930年1月刊）「孤独者」165頁に「这里有新的宾客……新的冷眼和恶心」という一節があるが、魯迅の日本語訳者として最も有名な竹内好は「恶心」を「敵意」と訳しているのに対し、¹⁰ 増田渉訳同作では「嘔吐気」と訳している。一般的に現代中国語の「恶心とxin」は日本語の「嘔吐気」の意味であるが、古典語として「è xin」と発音した場合には「悪念」という意味となる。¹¹ はたして「恶心」は「敵意」という竹内訳が良いのか、「嘔吐気」という

⁸ 『魯迅・増田渉師弟答問集』、9-10頁。

⁹ 藤井省三教授のご教示によれば、同訳『故郷／阿Q正伝』（光文社古典新訳文庫）は2009年4月初版第一刷は13000冊、2014年6月第5刷までの累積発行部数は22000冊に達している。

¹⁰ 竹内好訳『魯迅文集』第1巻、ちくま文庫、筑摩書房1991年329頁。竹内訳の岩波文庫1981年改訂版『阿Q正伝・狂人日記』はちくま文庫版と同じ単行本『魯迅文集』に基づく。

¹¹ 「恶心」の両義性については『中日大辞典増訂第2版』（愛知大学中日大辞典編集部編、1987年、東京・大修館書店）など日本の中日辞典にも語釈がある。

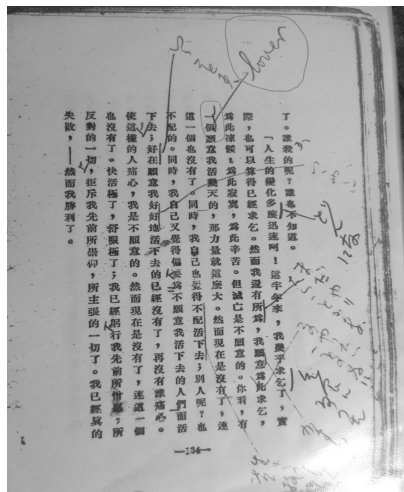
増田訳が良いのか、どちらであろうか。

図版Ⅱをご覧ください。増田渉直筆注釈本『彷徨』165頁の書き込みは「悪心」に「嘔吐気」という注釈を付しており、これにより私たちは少なくともは魯迅は1931年上海自宅での個人レッスンにおいては、「悪心」の意味するところは「敵意」ではなかった、と推定できるのである。原作者の意向を尊重するという原則に従うのであれば、「悪心」は「嘔吐気」と日本語訳するのがより適切であろう。このような事例は中国語原文の読者にもより多くの正しい理解の方法を与えてくれるものとなる。

第三に、魯迅小説の難解な部分に対し、新解釈をもたらす転機となるのであり、この点については、次節で短篇小説「孤独者」を一例として取り上げて、詳細に論じたい。

(三)「孤独者」の中の空白と「lover」の発見

増田渉直筆注釈の解読作業が難航する中で、筆者は一個の明晰容易な英単語が紙面で異様なまでに精彩を放っているのを発見した——すなわち図版Ⅴの164頁右上の「lover」である。「lover」が魯迅あるいは増田渉いず



図版Ⅴ PP164

lover の文字は一目瞭然である

れの筆跡なのか、これについてはなおも検討の余地があるものの、この注釈の重要性は言を俟たないであろう。

増田旧蔵の『彷徨』の中の欧文書き込みには、以下のようなものがある。38頁「and」、78頁「old foll¹² 老阿呆」、126頁「Srovpn の名〔筆者注：「Srovpn」は判読不能〕」、160頁「must」などがあるが、他に「lover」の書き込みはない。『魯迅・増田渉師弟答問集』の中の欧文書き込みには、10頁魯迅「yes」、38頁魯迅「normal」、124頁魯迅「Iliad」、134頁魯迅「Lombroso / Voltaire」、158頁増田「G〔魯迅が「C」に修正〕 rara Bow」、166頁魯迅「Leonardo da Vinci」、184頁増田「Emerald」などがあるが、「lover」の書き込みはない。

ところで藤井省三氏は最近発表した論文「魯迅恋愛小説における空白の意匠——「愛と死（原題：傷逝）」と森鷗外「舞姫」との比較研究」の冒頭で、魯迅短篇小説「傷逝」を「愛と死」と訳し、その物語における空白について次のように指摘している。

「愛と死（原題：傷逝）」は、魯迅文学における唯一の恋愛小説であり、最も謎多き作品でもある。その謎とは主に一人称語りが物語の随所に残した空白であり、恋愛事件における男性当事者の手記という小説の様式に起因するものである。¹³

藤井氏は「傷逝」を、同作と類似の物語構造を有し、また魯迅が愛読した森鷗外『舞姫』と比較しながら、「傷逝」の空白部の意味を推理している。その推理作業を始める前に、同教授は「孤独者」における謎についても次のように指摘している。

¹² “foll” は “fool” の誤記であろう。『魯迅全集』第二巻収録の「石鱗」（原題：肥皂）の注釈もこの英単語に対し同様に解釈している。

¹³ 藤井省三「魯迅恋愛小説における空白の意匠——「愛と死（原題：傷逝）」と森鷗外「舞姫」との比較研究」『東方学』125輯、2013年1月、1頁。この論文の筆者による中国語訳は『南京師範大学文學院学報』2014年第4期に掲載予定である。

「孤独者」は篇末に「一九二五年一〇月一七日了」という記載があるものの、『魯迅日記』には同作執筆に関する記載がない点も「傷逝」と共通する。だが「孤独者」は語り手「僕」が、友人魏連殳の半生を語るという構造であり、読者が主人公をめぐる空白を意識することは少ない。「孤独者」の中の謎とは、主人公が語り手「僕」宛の手紙で「かつて……私に幾日かでも生きることを願った人自身は、生きられなかった。この人は敵におびき出されて殺された。殺したのは誰か？ 誰も知らない。」と記しているのに、「この人」が誰であるかが明示されていない点である。¹⁴

これは確かに長年来、一般読者と研究者が解読に際し困惑させられてきた謎であり、本節では、私たちは「孤独者」の主人公のこの「私に幾日かでも生きることを願った……この人」（原文：愿意我活几天的……这人）という告白について議論を進めよう。この一段の「この人」の意味するものに対しては、これまで主に二つの仮設が立てられており、一つは林非の「革命家」説であり¹⁵、一つは李允経の「愿意 - 魏連殳・活下去的人，正是许广平罢」という許広平モデル説である。¹⁶

胡風の回想によれば、彼はかつて魯迅と次のような問答をしたという。「私はこう訊ねた「孤独者」の中の魏連殳は范愛農の影なのですか。」彼は考えることもなく「あれは私のことを書いた……」と答えてからしばらく間を置いて「もちろん范愛農の影もある」と答えた。¹⁷このような問答があったので、李允経はもしも魏連殳のモデルの中に魯迅自身の影があるのならば、「私に幾日かでも生きることを願った……この人」のモデルは許広平に違いない、と考えたのである。代田智明・東京大学教授も李允経

¹⁴ 藤井省三 同上

¹⁵ 林非『中国现代小说史上的鲁迅』西安・陕西人民教育出版社1996、198頁。

¹⁶ 李允経『鲁迅的情感世界：婚恋生活及其投影』、北京工业大学出版社、1996年、第208頁。

¹⁷ 胡風「魯迅先生」、『胡風全集』湖北人民出版社、1999年、65頁。

の説に対して、「言いかえれば、魏連受を愛する恋人という推定である。これに異論はない。」と述べている。¹⁸

だが2009年6月発表の陳燁・杜国景共作「双重孤独的纽带——魏连受之缺席婚恋浅探」は、李允経説を否定している。

李氏の見解は魯迅の経歴から推論しているに過ぎず、テキスト内部からは根拠を見付けだす事ができない。しかも、魏連受の性格からして自らの信仰などを自分が好きになった女性の身に託すということは絶対にあり得ない。単純な恋人という役回りでは精神的支柱と先導役という重責を担う事はできない。しかも、私たちはテキスト内部でこの人が男性か女性かも確定できないのである。¹⁹

そして陳燁・杜国景は「この人」とは必ずしも現実中の人物とは限らず、隠喩あるいは象徴の可能性も高く、すなわち魏連受の以前の信仰信念である。」と推定している。²⁰ この新しい論点を「信仰信念説」と呼ぼう。

このたびの増田渉直筆注釈に関する研究において、非常に有意義な新発見があった。すなわち、今から80余年前、増田渉は魯迅宅で個人教授を受けた時に、あるいは魯迅に向かってこの問題をめぐり次のように問うたことがあったのかも知れない、すなわち「私に幾日かでも生きることを願った……この人」とは誰か」と。

注釈本164頁5行目冒頭の「一個願意我活幾天的……這人」の「一個」という二文字の傍らには異様なまでに明晰な手書きの注が残されているのだ。それは一本の線および力強い筆跡で書かれた「lover」という一語で

¹⁸ 代田智明『魯迅を読み解く：謎と不思議の小説10篇』東京・東京大学出版会、2006年、182頁。

¹⁹ 陳燁・杜国景共作「双重孤独的纽带——魏连受之缺席婚恋浅探」『贵州民族学院学报（哲学社会科学版）』2009年第3期、158頁。

²⁰ 陳燁・杜国景共作「双重孤独的纽带——魏连受之缺席婚恋浅探」『贵州民族学院学报（哲学社会科学版）』2009年第3期、158頁。

ある。説明「一個〔願意我活幾天的〕」という一句の中この手書きの注は、「私に幾日かでも生きることを願った……この人」とは誰か」という増田渉の問いに対する魯迅の回答に違いない。

この注釈は誰が書いたのかについてはしばし置くとして、魯迅が当時増田渉を個人教授していた状況に即して「私に幾日かでも生きることを願った、この人」、すなわち「lover（恋人）」が指示するものを考えてみよう。もしもこの「lover」が魏連受の恋人であるとしたら、この新発見は私たちの疑問に対し適切な回答を提供してくれるのである。

魏連受の身には確かに魯迅が言うように魯迅自らが投影されているのだが、しかし魏連受の親友で本作の語り手である「申飛」の形象も魯迅の投影に違いないと筆者は考えている。作品から浮かびあがってくるものは多重性格・多重に葛藤する複雑な心情の魯迅なのである。「lover」のモデルとは李允経氏等が強調するように許広平であるのか、という点についてはなおも議論が必要であろう。

（四）「傷逝」と「孤独者」

作品「傷逝」の篇末には「1925年10月21日畢」という記載が、作品「孤独者」の篇末には「1925年10月17日畢」という記載があるため、すでに「傷逝」と「孤独者」とを並列して読む研究者がおり²¹、筆者はさらに「傷逝」の空白と「孤独者」の謎を並列して読解することにより、さらに深い理解を得られるものと考えている。なお「畢」は、終了、の意味であり、魯迅作品末尾の日付で「畢」が使われているのは、「孤独者」「傷逝」の2作品だけであり、極めて珍しい例である。先ず「孤独者」と「傷逝」のあらすじを先に述べておく。

「孤独者」は、「私」が語り手となって、友人の魏連受をその没後に回想

²¹ 「孤独者」と「愛と死」を並列して読むという試みには、以下の論文がある。安文軍「病、愛、生計及其他——「孤独者」与「傷逝」并置閲読」『中国現代文学研究叢刊』2008年第6期、錢垂玲「論魯迅小説中的女性“另類”叙事——「孤独者」与「傷逝」的另一種并置閲読」、《常州工学院学報 社科版》第30卷第4号2012年8月。

する形で展開する。二人とも開明的な教育を受け、筋金入りの西歐的思考の持ち主であり、共にS市やその近郊で教員をしていた。たまたま「私」が魏の郷里の山村に滞在していたとき、魏の祖母が亡くなった。駆けつけた魏に対して一族郎党は、この「西洋かぶれの新党」に対して、伝統通りの葬儀を行うように迫る。魏は意外にも素直に従ったが、長い葬儀が終わると「傷ついた狼が深夜、曠野に吠える」ように号泣する。

「私」は魏の下宿をしばしば訪れ、友情を育むようになる。祖母は後妻で魏とは血のつながりがなかったこと、没落した一家の家計を針仕事一つで支えて魏を育てたことなどを知る。魏は封建的な親戚や教育界に対しては「家庭を破壊せよ」などと呼号する過激派であるのだが、「希望は子供たちにある」と誰彼となく子供たちを可愛がった。しかし魏が職を失うと、その子供たちも彼を無視するようになった。

「私」も失業と職探しの苦境におかれるが、魏からの手紙で、彼が絶望のあまり軍閥師団長の顧問となったこと、大枚の月給を受け取るようになったこと、すると世間の人々は手のひらを返し、相継いで贈り物をし始めるなど、阿諛追従の渦が生じていることを知らされる。「私」は各地を転々として職をさがすが見つからず、半年ぶりにS市に戻って魏を訪ねると、何と彼は二日前に死んでいた。給料は連日連夜の酒宴で使い果たすなどまるで自暴自棄のような暮らしぶりで、自ら病いを悪化させるようにして死んだという。

しかし、魏は「私」宛に次のような言葉を綴った手紙を残していた。「かつて、私が幾日かでも生きることを願う人がおり、私自身も幾日かでも生きることを望んでいたときには、生きられなかった。今ではほとんどどうでもよくなったのだが、それでもまだ生き延びたい……私に幾日かでも生きることを願った人自身は、生きられなかった。この人は敵におびき出されて殺された。殺したのは誰か？ 誰も知らない。」

篇末の魏連受の手紙には、「かつて、私が幾日かでも生きることを願う人がおり……この人は敵におびき出されて殺された。殺したのは誰か？ 誰も知らない。」という謎の言葉が残されて、読者の想像力を掻き立てている。

篇末の日付から「孤独者」の4日目に完成とされたと推定される「傷逝」は、新しい価値観である男女平等と自由恋愛という理念に従って、世間の好奇の眼や、親族の反対を押し切って、同棲という新しい生活を始めた若い男女の愛の破綻を、男性の手記という形で描いている。二人は新しい価値観に導かれ、新しい生き方を夢見て、生活を共にしたが、男性の涓生（チュアンション、けんせい）が役所を解雇されて、無職となり、経済的に破綻をきたし、ついには涓生は、愛そのものにも疑問を抱くようになり、女性の子君（ツーチュン、しくん）に対し冷酷にも愛情が冷めてしまったという告白さえ行う。その後、子君は父親に連れ去られ、やがて原因不明のまま子君の死の噂が涓生に伝わってくる。涓生の手記は「僕は新たに生きる道に向かって第一歩を踏み出さねばならず、僕は真実を深く心の傷の中に隠し、黙って進まなくてはならない——忘却と嘘とを僕の道案内にして……」という言葉で結ばれるのであった。

藤井省三氏は25年前に、涓生は三度までも子君の死を思うという冷酷さの一方で、「どこへ行くのか」という問いに三度直面しており、このような彼の姿には、イエスを三度否定したのち殉教死の道をたどった使徒ペテロの「クオ・ウァディス（主よ何処へ行き給う）伝説」が重ねられている、と指摘している。²² また同教授は最近の論文において、「「孤独者」は語り手「僕」が、友人魏連殳の半生を語るという構造であり、読者が主人公をめぐる空白を意識することは少ない。「孤独者」の中の謎とは〔中略〕「この人」が誰であるかが明示されていない点である。」²³ と述べている。

以上は両作品のポイントおよびこれまでの中日の研究者が指摘した未解明の課題である。この謎について先行研究を踏まえつつ、さらに深く「孤独者」の中の「この人」の意味を探ってみよう。

²² 藤井省三「魯迅と『さまよえるユダヤ人伝説』」平凡社『月刊百科』1986年11、12月号。

²³ 藤井省三「魯迅恋愛小説における空白の意匠——「愛と死（原題：傷逝）」と森鷗外「舞姫」との比較研究」1頁。

(五) 「lover」の謎と両作品の相互補完関係

本節では「孤独者」と「傷逝」との連続的相互補完の関係から「lover」の真意を求めたい。この二つの小説が相互に空白を残し、相互に空白を補填しあいながらある種の継承呼応の関係を構成していると筆者は考えている。換言すれば、魯迅のこの二つの小説はほとんど同時期に構想執筆されたのであり、魯迅は主人公たちに対し別々に最後の悲惨なるこの世との別れの運命を与えたのである。

先にもう一度「孤独者」の主人公魏連受が友人申飛に送った手紙の中の幾つかのキーワードを見てみよう。

〔前略〕かつて、私に幾日かでも生きることを願った人がおり、私自身もおも幾日か生きたいと思ったが、生きていけなかった。今では、もうそうする必要が全くないのだから、しかし生きていこう……

しかしそうして生きていくのか。

私に幾日かでも生きることを願った人自身は、生きられなかった。この人は敵におびき出されて殺された。殺したのは誰か？ 誰も知らない。²⁴

「孤独者」の謎に対しては、以下のような推定が可能であろう。魯迅は魏連受の「この人は敵におびき出されて殺された。殺したのは誰か？ 誰も知らない。」という自問自答の答案を、「傷逝」に思いを籠めて託したとも言えよう。「この人」とは魏連受が以前に外地で在学・勤務した時期の恋愛の相手であろう。

「傷逝」の女性主人公の子君が出て行った後、男性主人公の涓生は孤独

²⁴ 原文は以下の通りであり、増田渉直筆注釈本には（ ）の書き込みがある。「先前、還有人願意我活幾天，我自己也還想活幾天的時候，活不下去（生きていけない）；現在，大可以無須了（もうそうする必要がないのだから），然而要活下去……。」（生きていこう？ O・K）「然而就活下去么？」（さうすると 生きていこうか）

を噛み締めながらも、期するところのある暮らしを送ることができた。しかし「lover」であった子君逝去を知った後は、涓生は希望なき孤独の思いを深め、ついに世を捨てる悲惨な運命を歩んだのだ。

筆者は「傷逝」の女性主人公子君が「lover」の原型であると推定している。換言すれば、子君は「lover」を具体化した人物なのだ。²⁵ それでは、「私に幾日かでも生きることを願った」が「敵におびき出されて殺された」という「この人」とは一体どのような「lover」だったのか。

まさに藤井氏が指摘するように、「傷逝」のヒロインの姓、学歴、職業、身分はすべて不詳である。彼女が父に連れられて行くときでも、それが彼女自身の要求であるのか、父による強制的連行であるのかも、明確には語られていない。子君は同棲の家から出て行く時に、一通の手紙も残していないのだ。それでも涓生が「幾日かでも生きることを願っていた」ことは、次の一節から読み取れよう。

ただ塩と乾燥唐辛子、小麦粉、白菜半分が一カ所にまとめて置いてあり、その脇に銅貨数十枚があった。これは僕たち二人の現実のすべての材料であり、今や彼女はそれを丁寧僕一人のために残して、無言のうちに、これでこの先は長く生きていくようにと教えているのだ。²⁶

これにより、先ほどの「lover」とは子君であると推定できるだろう。「lover」を失った男性主人公は孤独な人となり、「孤独者」においては「lover」の逝去により、主人公魏連受はついに「勝利」と「失敗」とがからみ合う中、寂寞と孤独との苦悩の内にこの世を去る。これこそ涓生と魏

²⁵ 前掲李允経著書も、許広平は魯迅「孤独者」執筆時期と推定される1925年10月17日には元気で北京女子師範大学で学んでいただけでなく、同校非常勤講師の魯迅と頻繁に往来していたと推測される、と認めている。

²⁶ 拙訳に際しては、藤井省三訳『酒樓にて／非攻』光文社古典新訳文庫を参照した。127頁。《魯迅全集》、第二巻、人民文学出版社、2005年、第129頁。

連受風という二人の主人公が「lover」を失った後に歩むことになる共通の運命なのである。

(六)「孤独者」の主人公の名前の深層

「孤独者」の中の主人公の「魏連受」（ウェイリエンシユー、中国語発音のピンインは Wei lian shu）という名前からも魯迅の創作意図を窺えるのであり、「魏連受」とは大いに含意のある名前である、と筆者は考えている。「涓生」と「子君」にも同様に深い意味が秘められているのだが、字数に限りがあるので、本稿では省略する。

まず「魏連受」の「受」の字に着目すれば、これは中国人の名前としては極めて稀な使用で、中国の大学生でも読めるものが少ない。今この時代でも人の名前として出て来ない。故に、魯迅が「受」という字を使うからには重層的な意味を籠めているに違いない。

まず、「受」は本来古代の武器を指し、竹木で作られ、先は尖っているが、刃はなく、それほど威力は無い武器である。魯迅はしばしば自分の筆を武器に喩えているが、そのいっぽうで威力の無い武器だと自嘲しており、それでも彼はこの筆による社会改革を希望していたのだが、この名前の中の「受」にも同様の寓意が籠められているに違いない。

また、字音は、同じくピンインで Wei lian shu となり、相似性から考えると、「爲運輸」と読み、「運輸（連敗の意味）」の運命を意味する。

さらに、字形あるいは字の形体から考えてみると、「魏連受」を「為連没」、または「為連歿」と解説することも妥当ではないか。「没」はいなくなる、「歿」は亡くなる、いずれにせよ、最終的結末は死である。

さらに言えば、「爲殮書（納棺の為に書く発音は同じく Wei lian shu）」つまり、葬るために書いたと言える。そもそも作品冒頭で語り手は「我和魏連受相識一場，回想起來倒也別致，竟是以送殮始，以送殮終。（私と魏連受との付き合いと言え、思い出しても変わっており、なんと入棺で始まり、入棺で終わったのだ）」と述べているのだ。この一句を深く考えると、「孤独者」は死をテーマとして書かれた、と断定してよい。

またあるいは、「爲恋書〔恋のために書いた〕」という連想も可能である

う。こちらの発音も同じく Wei lian shu となる。魯迅は愛しあう男女主人公を「連死」させて「連輸〔連敗の意味〕」の運命と別れを告げさせたと言えようか。

確かに、魯迅の両作品の本文末尾に付された脱稿時期を見ると、「孤独者」完成からわずか四日後に「傷逝」も擱筆されている。しかし筆者にはこの四日間の時間差とは、どちらが先に構想され、どちらが先に起稿されたかを説明するものではなく、どちらがより遅くに書き終えたかを説明するのみと考えられる。

魯迅はその他の作品末尾の日付には「畢」という字を用いることはなく、「孤独者」、「傷逝」両作にのみ「畢」という字を用いたことは、両作品の間の濃厚な関連性を示唆するものではあるまいか。

「傷逝」は、魯迅が涓生のようなタイプの主人公がいかに「lover」を失うかを表現するため、そして「lover」である女性主人公を失ったのち最後に「傷逝」すなわち「死者を悼む」或いは「心に傷」を背負いつつ逝く」という悲惨な運命を表出するために創作したものである。そして「孤独者」は、主人公の魏連受が「lover」喪失後にいかに「傷逝」するかという、「傷逝」の続きを書くための作品であろう。

続けてこの二つの小説の構想・創作過程の進行について考察したい。「傷逝 (shangshi)」と「喪失 (sangshi)」の発音は似ており、意味も近く、筆者は幾人かの紹興出身の方に訊ねたところ、両者の発音がほぼ同じであるとのこと回答を得ている。「傷逝」は先ず恋人の喪失を描き、その後に傷ついた後の逝去を描いたので、作者は最終的に題名を「傷逝」としたのである。「傷逝」であろうが「喪失」であろうが、共にテーマに非常に適合している。

「孤独者」では「lover」のことは具体的には語られておらず、僅かにその存在が暗示的に表現されるだけである。魯迅は魏連受の学生時代の履歴についても述べておらず、彼が生きていくことの支えとなっているのは、僅かに「lover」の「幾日かでも生きることを願った」の一句であり、続けて描いているのは語り手申飛の「奇妙な」旧制中学での教員生活である。魏連受は「lover」が「敵におびき出されて殺された」のち「生きていく

のを継続することを放棄」したが、最後には偽善的社会的旧習・悪徳勢力に迎合して汚れ、精神的および肉体的に旧社会と共に壊滅せんとする宿願を達成し、自滅の方法により旧社会勢力への復讐を完成したのである。

「傷逝」の主人公涓生と「孤独者」の主人公魏連受との二人の間の実際の経歴も互いに交わり重なり合っており、涓生は基本的に魏連受の前半生のイメージであり、「傷逝」の物語展開は「孤独者」で省略された空白部分にあたるであろう。魏連受が外地で学んで卒業したのち社会に出て仕事を探し、恋愛同居した物語としても読めるのである。小説「傷逝」を構想・創作するのとほとんど同時に、「lover」を喪失した魏連受が限りなく孤独となり、最後に悲惨にも他界するという境遇を、魯迅は連続して構想・創作したのである。

(七)「孤独者」と「愛と死」のテーマ

死の意識は魯迅の生命哲学の一部であり、『野草』を貫く中心的題材でもある。『野草』は全二四篇から成り、仔細に読むと、その内の一八篇は死に触れるか死をテーマとするものである——本稿では一つ一つを取り上げることはしないが、特に注目に値するのは同時期の創作で、「孤独者」の前の一篇、1925年7月12日に書かれた「死後」、そしてその後の同年12月14日の「このような戦士」であり、これらの作品はともに死を表現しているため、連作と見做す事ができよう。

孤独な人の結末は死、あるいは精神的死（涓生のように）、あるいは肉体的死（魏連受のように）であり、最後には死を以て終わる。このため「傷逝」と「孤独者」も同様に愛と死の論述がテーマである。

「lover」は恋人であり、恋し合った二人が離ればなれとなり、最後にこの世を去る、ここにも「愛」と「死」のテーマが深く隠されているのである。

魯迅は『野草』に次のような題辭を記している。

私は沈黙しているとき、充実を覚え、口を開こうとすると空虚を感じる。過去の生命はすでに死んだ。私がこの死に大歓喜を抱くのは、これによ

りそれがかつて存在していたことを知るからだ。死んだ生命はすでに腐敗している。私がこの腐敗に大歓喜を抱くのは、これによりそれがなおも空虚にあらざることを知るからだ。

生命の泥は地上に棄てられ、高木は育てず、野草を育てるばかり、それは私の罪なのだ。²⁷

この一節からも私たちは「孤独者」「傷逝」そして『野草』に共通する死のテーマを見出すことができよう。

魯迅は、涓生と魏連受という貧しい主人公が「lover」を失った後に「連歿」に至る運命を描くために、両作品を創作したのかもしれない。もちろん、両作品の間には異なるところもあって、魏連受は本当に死んでしまう。だが涓生はなおも生きていたと言え、「愛と死」の結末で彼は「忘却と嘘とを僕の道案内にして」「新たに生きる道に向かって第一歩を踏み出す」と語っており、このように彼の古い自我も死んでいるのであり、これもまた一種独特な「歿」である。彼は精神的に死んでいるのであり、涓生は心の死を遂げ、魏連受の前半生の運命もこのように終わるのだ。

魏連受はなぜ結婚しないのか、多くの人が関心を寄せ、「申飛」も何度も質問したが、一回も直接の答えを得られない。「孤独者」において終始、謎のままである。だが「傷逝」と繋げて読むと、彼が結婚しない、恋愛しない理由が分かるだろう。彼は本来は子供や、虐げられている人々に対し深い同情を寄せていたが、「lover」の死を知った後には事情は大きく変化する。「僕はすでに僕が以前憎み反対していたすべてを実践し、僕が以前崇拝し、主張していた一切を拒否した。僕はすでに本当に失敗した——だが僕は勝利したのだ。」自らの倫理観と生活苦が、魏連受に苦痛に満ちた逆転を促しており、それから想起させられるのは、「傷逝」の中で涓生が三度も「突然彼女の死を考えた」こと、および彼の懺悔である。「僕はいわゆる死者の靈魂が本当にあり、いわゆる地獄が本当にあればと願っており、そうであれば、たとえ暴風が荒れ狂うとも、僕は子君を探し出し、彼

²⁷ 《鲁迅全集》第二卷、人民文学出版社、2005年、163頁。

女に向かって僕の悔恨と悲しみとを語り、彼女の許しを求めるか、さもなくば地獄の業火が僕を囲んで、激しく僕の悔恨と悲しみとを焼き尽くすことだろう。／僕は暴風と業火の中で子君を抱いて、彼女の寛容を乞い、あるいは彼女を歓ばすのだ……。」両作品の主人公の真剣な反省は、精神的にも相通じている。

「孤独者」における魏連受の「lover」の死をめぐる「殺したのは誰か？誰も知らない。」という自問自答と、「傷逝」末尾の「どうして死んだんでしょうか？」「知るもんか。とにかく死んだんじゃよ」という涓生と年輩の有力者との対話とは呼応しあっているのだ。

その一方子君は父親に連れられて吉兆胡同の家を出るが、これは“lover”が「敵に誘殺（おびき出して殺す）された」という魏連受の考えとある程度のある関係があるのだろう。「孤独者」が提示する“lover”の死とは、「敵に殺された」のではなく「誘殺」されたのだ。この「誘殺」とは何を指すのか。それは読者に「傷逝」のプロットの一部を連想させることだろう——子君の死とは父や一族からあるいは精神的迫害を受けたため病死したのか、あるいは蔑視虐待されたため憤然と自殺したのか——当然この死には、愛の喪失という要素もあるだろう。「誘」の一字は読者を、子君はなぜ死んだのかという沈思へと導き、これは今に至るも依然として解けぬ謎ではある。それでも私たちは魯迅・増田渉直筆注釈が提供してくれる手がかりを借りて、「孤独者」と「傷逝」とを繋いで読むことにより、子君の死因に対しても新しい理解を生み出せるだろう。

（八）魯迅訳『労働者シェヴィリョフ』と「孤独者」の主人公

一九二六年八月、北京・北新書局から魯迅の第二短篇集『彷徨』が刊行されると、向培良（1905-59）が「「孤独者」を論じる」を文芸誌《狂飆》第五期（1926年11月17日）に発表。「彼の友人が敵におびき出されて殺された」後の魏連受を、魯迅が翻訳したロシア作家アルツイバーシェフの長篇小説『労働者シェヴィリョフ』の主人公と比較して、次のように述べている。

しかし魏連受はついに失敗、前進して攻撃し、攻撃したが失敗した。彼は社会に棄てられ、彼の友人は敵におびき出されて殺され、こうして彼は前戦から退却、自殺的仕事へと向かい、可能なかぎりにおいて、彼が愚弄できる人々を愚弄し、しかも彼自身をも愚弄し、もの寂しい冷たい悲哀を自覚しつつ社会に復讐し、怒りもなく、火もなく、狂風のような力もなく、ひたすら寒々とした悲哀を自覚し、社会に復讐すると同時に自らを破壊しており、この一点において、私はただちにシェヴィリョフを、彼がピストルで彼を圧迫し彼を攻撃する社会に報いたことを思い出した。²⁸

向培良は1929年10月以後左翼文学に反対し、翌年には民族主義文学を提唱するに至り、魯迅の批判を受けたが、1925年4月から28年頃までは、魯迅が率いる文学運動の若い仲間であった。その向培良が「對社會復仇而又同時破壊自己」する魏連受から、シェヴィリョフを連想している点は興味深い。シェヴィリョフとはロシア作家アルツイバーシェフ (Mikhail P. Artsybashev, 1878～1927) の長篇小説『労働者シェヴィリョフ』(1909)の主人公であり、魯迅は同作を翻訳して1921年の『小説月報』第12巻第7～12号まで連載した後、翌年5月に商務印書館から刊行、さらに27年6月には北新書局から改版本を刊行している。

主人公シェヴィリョフは、無政府主義の革命家である。運動の途上で、同志であり愛人でもあった女性が絞首刑に処せられるなど、多くの苦難に遭遇しつつ、革命家の道を歩もうとする。官憲に追われ、逃亡生活を続けるが、発見され、警察との間で大立ち回りが演じられる。

民衆のために闘っている彼に対して、その民衆は警察と一緒に彼を捕まえようとする。劇場の最上階に追いつめられた彼が目にしたものは、華やかな舞台に拍手し陶酔する民衆であった。絞首台に消える運命にある自分に比して、歓楽の限りを尽くしている彼らを目撃し、深い憤りに

²⁸ 中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料匯編』第1巻、中国文連出版公司、1985年、196頁。

かられ、彼らにピストルを乱射する。

魯迅はこの無政府主義者の復讐の情念について、「改革者の受ける迫害、指導者の受ける苦しみは、今日はもとより、——将来にわたって、何十年以後も、多くの改革者の境遇が、彼とやはり似ているのではないか、と私には思えた」²⁹と述べた。

民衆のために「生涯のうちでもっとも貴いものを犠牲にして」「共同事業のため死へと突進し」する革命家の苦しみは、もとより幸福な者との接点はないが、「不幸な者」とも接点を持たないこののである。それどころか、彼らは追跡の者に加勢して、迫害を加え、彼の死を楽しむのであり、「幸福な者と同様に、別方面においては、浅ましい生活を続けている」…彼は「経験」にもとづいて、トルストイ的無抵抗主義に対し反抗し、さらに幸福な者に対すると同様に不幸な者に対しても宣戦せざるをえなかった。こうしてシェヴィリョフの社会に対する復讐が完成された。³⁰

藤井省三氏はこの小説の第14章で絶体絶命の窮地に追いつめられたシェヴィリョフが見る性的幻覚の場面が、魯迅『野草』「復讐」の章に与えた影響についても指摘している。

「孤独者」における魏連受の復讐とは、中国改革の理想も「lover」も失ったため、反動的軍閥の手先となって自堕落な暮らしに浸り死を急ぐという過激なテロ行為とは、一見大きく異なっている。それにもかかわらず、魯迅の門下生であった向培良が魏連受からシェヴィリョフを連想したというのは、あるいは「孤独者」の例の一句「私に幾日かでも生きることを願った……この人」からシェヴィリョフの絞首刑になった革命同志兼愛人を連想したためであるのかもしれない。

魯迅は『『中国新文学大系』小説二集序』（一九三五年三月）で向培良をその時代の代表作として取り上げた際にも、次のように半ば批判的に述べている。

²⁹ 『魯迅全集』第3巻『華蓋集統編』『記談話』375～376頁。

³⁰ 藤井省三『魯迅事典』三省堂、2002年、110～112頁。

だが狂飆社は「虚無的反抗」にのみ留まったようすで、やがて解散し、現在残されているのは、向培良のこの響き渡る戦闘の叫びであり、それは半分シェヴィリョフ（Sheveriov）風の「憎悪」の前途を説明している。³¹

鲁迅と向培良が親しかった時期には、二人は革命家シェヴィリョフとその愛人革命家の刑死について語り合ったことがあったとも想像される。その意味では、林非の「革命家」説の系譜は、それなりの説得力を持つと言えよう。

ところで多くの不幸な者のために「生涯のうちでもっとも貴いものを犠牲にして」「共同事業のため死へと突進し」てきたシェヴィリョフは、革命同志の愛人も絞首刑に処せられ、一人残された彼自身も「幸福な者」と共に「不幸な者」にも追い詰められると、「トルストイの無抵抗主義に対し反抗し、さらに幸福な者に対すると同様に不幸な者に対しても宣戦せざるをえなかった。」シェヴィリョフが目指していた自己犠牲による革命とは、「不幸な者」すなわち被抑圧階級の人々を救済の対象としていたにも関わらず、救済すべき「不幸な者」が復讐の対象へと転じた事が、シェヴィリョフの最大の悲劇だったと言えよう。

これに対し、「孤独者」の魏連受はすでに述べたように、本来は子供に対し、虐げられている人々に対し深い同情を寄せていたが、「lover」の死を知った後には大きく変化し、「僕はすでに僕が以前憎み反対していたすべてを実践し、僕が以前崇拜し、主張していた一切を拒否」するに至る。このような変身を彼が自ら「本当に失敗した——だが僕は勝利した」と称するのは、向培良が指摘するように、逆説的ながら旧社会への復讐を実践し得たからであろう。劇場でピストルを乱射するシェヴィリョフの復讐と比べると、魏連受の復讐は遥かに穏健なものではあるが、絶望的復讐とい

³¹ 『鲁迅全集』第6巻 人民文学出版社、2005年、263頁。『中国新文学大系・小説二集』序は1935年3月2日執筆、8月30日初版の『中国新文学大系・小説二集』に掲載された。

う情念において、両者は共通していると言えよう。その意味では、「孤独者」の「lover」のモデルの一人として、『労働者シェヴィリョフ』の女性革命家のような存在を想定することも可能であろう。

周作人は、「孤独者」の主人公の祖母の葬儀の描写は、魯迅自身の体験に則しているという。³²また「小柄な痩せた男」で「角張った面長な顔の半ばまでボサボサの髪、真っ黒な眉と濃い髭、その中から両眼が光を放っている」という描写も魯迅を想起させる。この「孤独者」は当時の魯迅の苦悩の心象風景を強く映しだしている作品と言えよう。

終わりに

以上、本論文では、約80年前に魯迅・増田渉による直筆注釈メモの『彷徨』における直筆注釈に着目し、主に「lover」への発見を手掛かりとして、「孤独者」「傷逝」両作の関連性と相互補完性、および二つの物語の幾つかの構成要素に対してひとつ新たな解釈を提出した。さらに、主人公の名前に込められた深層、そして、「lover」のモデルのいくつかの可能性についても探った。

「傷逝」は魯迅唯一の恋愛小説であり、魯迅はその脱稿の日を「孤独者」完成の四日目に迎えているが、内容から見れば実際には「傷逝」は「孤独者」の「前篇」であり、「孤独者」は「傷逝」の「続篇」とであると読める。「孤独者」と「傷逝」とは魯迅が「lover」を喪失して孤独寂寞へと向かい、最終的に連続死の運命へと歩む女性主人公・男性主人公たちを描くために創作した二篇の小説なのである。

1925年10月、魯迅と許広平とは愛しい身を寄せあい、魯迅は熱愛の内に孤独な人生と別れ、古い自我の感覚と別れたために、「孤独者」「傷逝」の最後にそれぞれに極めて特別な「畢」の字を書き込んだと感られる。だが、この佳作二篇を直接世に問うことはせず、1926年8月の『彷徨』刊行を待って同書に収録したのだが、両作には新しい「lover」の力が秘められていたのだ。

³² 周作人『魯迅小説裏の人物』上海・上海出版公司 1954年 P54-85。

多くの謎と空白とを包み込んだ「孤独者」「傷逝」の解読の過程で、増田渉による魯迅短篇集『呐喊』『彷徨』直筆注釈メモは、筆者に極めて有力なヒントを与え、難解部分を正しく翻訳あるいは解読するための導きの糸となり、魯迅の小説をめぐる幾つかの重要な学術的問題に対し、独自の考察へと導いてくれた。1931年の魯迅と増田渉との間の燃えるような師弟愛により創り出された奇跡がそれを可能にしたと言えよう。増田渉直筆注釈メモの研究は、魯迅研究の領域を拡大し、魯迅作品解読を深化させるのに有益である、と筆者は確信するものである。